

〔論 文〕

前漢王朝建立時における劉邦集團の 戦闘経過について（上）

——劉邦集團内部の政治的派閥の形成を中心に——

陳 力

はじめに

前漢初期は、中国古代帝国の政治制度が「大統一」的な政治制度に向かう極めて重要な時期であり、特に前期王朝を作り上げた劉邦集團については、一九五〇年代前後から現在まで長期にわたって、様々な視角から研究がなされてきた。なかでも西嶋定生氏・増淵龍夫氏・守屋美都雄氏らによる、前漢初期の帝国の政治構造についての研究は重要であり、その成果は学界に広く認知されている。近年では李開元氏が先学の研究を踏まえ、「軍功受益層説」を提唱した¹⁾。

これらの研究では、主に劉邦集團の内部構造の分析を手がかりとし、特に劉邦集團の等級・階層構造の析出に重点を置いて、漢帝国の成層的ピラミッド型の政治構造を解明しようとしている。このような分析方法は、前漢時代の支配層の構造及び中国古代王朝形成のメカニズムを把握するには極めて有益である。しかしそれは、劉邦集團の構造や漢帝国の社会構造などの分析のみに集中することとなり、楚人集團に属していたとされる劉邦集團が、なぜ「漢承秦制」の政治方針を採用して漢王朝を築き上げたのか、ということに対する説明はなお明らかではない。確かに劉邦集團の内部には、「豊沛元從集團」などの成層的概念によって区分しうる側面はある。しかし、同じ「豊沛元從集團」に属していた劉邦集團の成員すべてが、漢初の政治において必ずしも政治的に同じ考えを持っていたとはいえないのである。

劉邦集團が中国全土を支配していく過程において、その上層部の成員は特定の地域とそれぞれ密接な関係を持つようになった。つまり劉邦集團の同じ階層に属する構成員であっても、それぞれが異なる地域で戦闘と支配を行うことにより、次第に各人に特有な政治的利益が生じていったと思われる。このような状況と個人的人間関係の要素が絡み合い、最終的には劉邦集團のなかでいくつかの政治的派閥が発生した。史料にみえる「〔曹〕參始微時与蕭何善，及為将相，有卻」（『史記』卷五四）という記事や、樊噲・周勃・灌夫と陳平の争い（『史記』卷五六）に関する記述は、劉邦集團内部に政治的派閥が存在したことを示している。

筆者は近刊別稿において、蕭何を中心とする、いわゆる「関中派」と、曹參を中心とする「関東派」という二つの政治的派閥の争いを分析し、このような派閥争いが前漢初期の首都を定める際に及ぼした影響を述べた。蕭何の「関中派」は、関中を中心とする秦地域の人びとに依拠する勢力であり、漢初の政争において優位な立場にあったがゆえに、前漢初期の首都は洛陽から関中派の本拠地である長安に移されたのである。しかしそこでは、劉邦集團における政治的派閥の形成経過については触れえなかった。そこで本稿ではこの点について補い、劉邦集團の具体的な戦闘経過と集團構成員の人的繋がりを述べたいと思う。紙面の都合上、本稿を二部構成とし、上篇では史料の分析と批判をおこない、劉邦集團の入秦までの戦闘を整理する。つづく下篇では、後期の項羽集團との戦闘経過と、そこでの劉邦集團の構成員の繋がりを分析し、劉邦集團内部の政治的派閥の形成を考察する。

I 関連史料の特徴

劉邦軍が秦王朝を滅ぼすまでの戦闘経過に関する史料は、主に『史記』高祖本紀、秦楚之際月表、高祖功臣侯者年表、漢興以来諸侯王年表、曹相国・留侯・絳侯周勃世家、樊噲らの列伝及び『漢書』の該当部分に散在している。『楚漢春秋』などの楚漢の争いを記録した史料は散佚したため、清儒茆らがその逸文を集めて輯本を刊行したが、本稿の研究目的からすると利用価値は低いと思われる。

劉邦集團は、論功行賞のために一定の戦闘記録を残している。『漢書』巻一六高惠高后文功臣表に、
 [劉邦] 初以沛公総帥雄俊，三年然後西滅秦，立漢王之号，五年東克項羽，即皇帝位。八載而天下乃平，始論功而定封。訖十二年，侯者百四十有三人。（中略）又作十八侯之位次。高后二年，復詔丞相陳平尽差列侯之功，録弟下竟，臧諸宗廟，副在有司。

とあり、さらに、

孝宣皇帝愍而録之，乃開廟藏，覽旧籍。

とある。これらの戦闘記録は、功臣に対する功績評定時に纏められ、高后二年に宗廟及び関連機関に保存された。のちに宣帝がそれを確認したいときに、廟藏を開いて見たのである。廟藏を開くという状況からすると、「有司」に保管されていた副本はすでに失われていたと思われ、またその原因は、武帝期の諸侯を消滅させる動きとおそらく関係している。このようなことから、これらの史料は、『楚漢春秋』のような私史の記事とかなりの差異があるし、また散佚や呂后期以後の改ざんも多少みられるのだが、あくまでも名目上は前漢朝廷が認めた公式記録であって、総合的に見れば、一定の信憑性がある。『史記』における曹参らの世家と樊噲らの列伝に記載された彼らの戦闘経歴は、おそらくこのような公的史料の要約である²⁾。

『史記』高祖本紀以外の諸世家・諸列伝には、その功臣の身分によって、功績と戦歴に関する記録の様式が異なる。曹参・周勃・樊噲のような重臣の記載は詳細で、初起時の身分、詳しい参戦履歴、戦績（「先登」・「最」・「殿」、場合によって殺傷数もある）、戦闘中に得た爵位などが記録されている。灌嬰・靳歙のような重要将領については、「初従」の状況、簡略な戦闘履歴と戦績（殺傷数のみ）、爵位の授与などが記録されている。

列伝を持たず、『史記』巻一八高祖功臣侯者年表に侯状が記録されている将校の功績記録は極めて簡略で、楚漢戦争までの記録はほとんどの場合は「初従」、関中・漢中・三秦奪還に参加したか否かにすぎず、数名の功臣についてのみ、楚漢戦争まで当人が参加した重要な戦いの名前が数例記録されているだけである。「高祖功臣侯者年表」全体を見ても、やはり楚漢戦争以前の記録は極めて簡単で、「功」よりも、経歴である「関」³⁾を記録するという史料の性格を有していると思われる。

楚漢戦争以後の経歴はやや詳細に記録されている。たとえば広成侯召欧の場合、「高祖功臣侯者年表」に、

以中涓従起沛，至霸上，為連敖，入漢。以騎將定燕・趙，得將軍，侯，二千二百戸。

とあるように、楚漢戦争以前の状況について、経歴は記録するが戦闘状況は記録せず、しかし楚漢戦争以後は、簡単ではあるが、戦闘地域や戦績まで記録している。また、博陽侯陳滎の場合は、

以舍人従起碭，以刺客将，入漢。以都尉撃項羽滎陽，絶甬道，撃殺追卒功，侯。

とあり、楚漢戦争前の記録は極めて簡略であり、楚漢戦争後の戦闘履歴については、戦闘地、戦闘内容、功を得た理由も記されており、召欧の記録と同じ傾向を示す。

このように、入秦前の記録は簡略で、楚漢戦争以後の記録はわりあい詳細に記されている理由は、史書作成時になされた司馬遷の取舍選択にもよるであろうが、そもそも当時の施政者たちが楚漢戦争前の経歴について、「功」よりも評定に必要な「関」の記録を重視し、その者がいつ初従したのか、入秦、入漢を経験したのか、などの項目に注目していたことにある。一方、楚漢戦争以後は、「関」よりも「功」がより重視されている。このような楚漢戦争前後の記述の差異は、おそらく劉邦軍団の大きさの違いに起因すると思われる。すなわち、楚漢戦争以前の劉邦集團の規模はわりに小さく、軍勢は一万人

Mar. 2012

前漢王朝建立時における劉邦集團の戦闘経過について（上）

前後の時期が多い。幹部の数もそれほど多くはなく、彼らは場合によっては個別の戦闘行動に出るが、ほとんどは同じ地域で同じ戦役に従事していた。つまり、それぞれの功績には差があるものの、小規模な集団のため、功績の状況は互いに周知されていたと考えられる。一方、楚漢戦争に入ると、劉邦集團の規模は大きくなり、また項羽らとの戦闘は複数の地域で展開される。各地に分散された幹部たちは、誰がいつどこに派遣されたのかということは互いに知り得たとしても、個々人の具体的な戦績まではわからない場合が多い。ゆえに、功臣の公的な功績記録は、この楚漢戦争の部分の特に詳細に記録する必要があったと推測される。

つまり、劉邦集團が天下を取るまでの戦闘過程に関する『史記』の記録は、その人物の身分によって、さらに記載された時期によって、その詳細の程度が異なってくるのである。そうであるのに、このような史料のみを用いて当時の人間関係を整理し、政治的派閥の形成を検討すれば、それは否応なしに集団の上層部の状態や、楚漢戦争の時期に偏るおそれがある。また、公式記録であるとしても、史料の散逸や司馬遷の史料編纂方針と誤記、後人の改纂による問題にも注意しなければならない。このため、まず『史記』と『漢書』の関連部分の史料を対比させながら作業する必要がある。

いまここに、秦二世二年後九月に劉邦が陽郡長に任命された時点を境にして、それ以前の戦闘を劉邦集團の初期戦闘の第一段階とし、秦二年後九月以後から漢元年一〇月までを第二段階として、諸史料を照合して表1・表2を作成した⁴⁾。この表をもとに、さらに史料の細かい特徴を考えていきたい。

表1・2に併記した史料の内容を詳細にみても、劉邦集團の戦闘経過を整理する場合、以下の点に留意する必要がある。

(1) 『史記』・『漢書』では、同じ事件に対する記述でも、地名・官名などが異なる場合がある。たとえば、

① 『史記』卷五七絳侯周勃世家の秦二世二年七月に「下甄城」とあり、『漢書』周勃伝に「下蕪城」とある。これは『漢書』の誤りである⁵⁾。

② 『史記』卷五四曹相国世家秦二世三年一〇月に「復攻之杠里，大破之」とあり、『史記』樊噲伝に「従撃秦軍，出亳南。河間守軍於杠里，破之」とあり、同卷灌嬰伝に「従撃破東郡尉於成武及秦軍於杠里」とある。『史記』高祖本紀集解と『史記』樊噲伝正義の記録を見れば、杠里と杠里は城陽に近い同じ集落であり、両字の発音と字形の類似性から混用されている。

③ 『史記』卷九五樊噲伝の秦二世二年八月に「破李由軍，賜上間爵」とあるが、『漢書』樊噲伝には「破李由軍，賜上聞爵」とある。「上間」は「上聞」の誤りである⁶⁾。

④ 『漢書』卷一高帝紀上に「南攻潁川，屠之」とあるが、『史記』卷八高祖本紀では「潁陽」とある。

以上に挙げた相違点は、ほとんどが誤植や字の仮借によるもので、これまでにすでに指摘されている。

(2) 本紀・紀などの記載には省略や記載漏れがあるが、これは他の記事によって補完できる。

① 『史記』卷一八高祖功臣侯者年表には、功臣の姓名が不完全な例がいくつかある。たとえば『漢書』は、陽河侯の氏名を「其石」としているが、功臣表にはその名前が記録されていない（『史記』索隠は「卞訢」とする）。

② 『史記』卷八高祖本紀に「攻胡陵，方与」とあり、『史記』秦楚之間月表に同じ記事がある。一方、『史記』卷五四曹相国世家には「將撃胡陵，方与」とある。『史記』の「功冊」から引用された史料のほとんどは、この時期の各軍事幹部の戦闘行為をいずれも「従攻」としており、「將攻」とあるのはこの一か所だけである。それだけでなく、この記事は曹参が將としてこの戦闘を指揮したような印象を強く与える。では実際にどうであったのか、他の史料をみてみよう。『史記』卷五四蕭相国世家や『漢書』卷三九蕭何伝にはこの戦闘に関する記事はないが、『史記』夏侯嬰列伝には「従攻胡陵，賜嬰爵五大夫」とある。しかし、『漢書』卷四一夏侯嬰伝に「嬰与蕭何降泗水監平，平以胡陵降，賜嬰爵五大夫」とあり、胡陵・方与の戦闘において最大の戦果をあげたのは、軍事指揮官の曹参ではなく、文官の蕭何と太僕の夏侯嬰であったことが明らかである。後掲表3で見えるようにそのとき夏侯嬰、周勃の爵位は曹参

より高い。

以上のように、相関史料を照合して総合的に史実を理解することは、劉邦集團の戦闘経歴を整理するときに極めて重要である。

(3) 諸資料に、初従や戦闘参加履歴の齟齬が存在する。

例えば、『史記』卷五六陳丞相世家には、

王陵者、故沛人、始為鼎豪。高祖微時、兄事陵。陵少文、任氣、好直言。及高祖起沛、入至咸陽、陵亦自聚党数千人、居南陽、不肯從沛公。及漢王之還攻項籍、陵乃以兵属漢。

とあり、王陵は楚漢戦争のときに劉邦集團に入ったという。一方『史記』高祖本紀は、

至丹水、高武侯鯁、襄侯王陵降西陵。

とあり、劉邦が入秦する前の南陽郡を攻略した時に、王陵は南陽で劉邦集團に降伏したとする。しかし、『史記』卷一八高祖功臣侯者年表に、

[安国侯王陵] 以客從起豐、以廩將別定東郡、南陽。從至霸上。入漢、守豐。上東、因從戰不利、奉孝惠・魯元出睢水中、及堅守豐、封雍侯、五千戶。

とあり、從起は豊で劉邦とともに関中・漢中に入ったとされている。

(4) 『史記』と『漢書』の戦闘経過の部分と照合すると、両書には高い類似性があるが、一部の記事は矛盾している。

①『史記』卷九五灌嬰伝は、

從攻陽武以西至洛陽、破秦軍尸北、北絶河津、南破南陽守齧陽城東。

とあり、尸北の戦闘が先にあり、後に河津を絶つ戦闘が発生したと記す。しかし、『史記』卷五四曹相国世家には、

絶河津、還擊趙賁軍尸北、破之、南攻犇、与南陽守齧戰陽城郭東。

とあり、河津を絶つ戦闘が先で、尸北の戦闘はその後と記されている。『史記』卷五七絳侯周勃世家や『史記』卷九五樊噲伝も同じ戦闘順序が記録されているため、おそらく灌嬰伝の記事が誤りであろう。

②『史記』卷五五留侯世家に、

沛公之從雒陽南出轅轅、良引兵從沛公、下韓十餘城、擊破楊熊軍。

とある。『漢書』卷四〇張良伝にも同じ記事があるが、『漢書』卷一高祖紀上によれば、劉邦の洛陽進攻は秦二世三年四月から五月までのことで、楊熊軍を撃破したのは同年の三月であるから、ここに記載された戦闘順序は混乱している。他の史料を総合的にみると、劉邦軍はまず開封付近から東進して秦軍と戦闘になり、さらに曲遇で楊熊軍を撃破した。そのご劉邦軍はさらに陽武・宛陵・長社を攻撃したが、『史記』卷九五樊噲伝は轅轅攻撃を長社の戦闘の後に置いている。後述するが、そのご劉邦軍は洛陽を攻撃したが失敗したため、函谷関からの入秦を断念し、南陽に南下するときに轅轅を通過したのである。いずれにしても、劉邦軍が楊熊軍を撃破したのは洛陽進攻前のことである。

(5) 史書の改ざんによって発生した問題

例えば、『史記』卷一八高祖功臣侯者年表に「[東武侯郭蒙] 以戸衛起薛、属悼武王、破秦軍杠里、楊熊軍曲遇」とあるが、『漢書』功臣伝には「東武貞侯郭蒙以戸衛起薛、属周呂侯、破秦軍杠里」とある。この記事の矛盾は、漢初に諸呂の乱が平定され、諸呂の王号を剥奪したときの改ざんによるものと認識されている⁷⁾。また、『漢書』卷九七上高祖呂皇后伝に「追尊父呂公為呂宣王、兄周呂侯為悼武王」とあり、悼武王と周呂侯は同一人物だということがわかる。

次に、以上に述べたような相関資料の問題を視野にいれつつ、諸史料を比較して整理を行い、劉邦集團の戦闘経過を復元する。

Ⅱ 秦二世二年一〇月から秦二世二年後九月までの劉邦集團の戦闘経過

数多くの研究書・通史・論考に、劉邦集團の前漢創立までの戦闘経過に関する記述があるが、ほとん

Mar. 2012

前漢王朝建立時における劉邦集團の戦闘経過について（上）

どが概略的あるいは記述的な内容である。そのなかで藤田勝久氏の『項羽と劉邦の時代——秦漢帝国興亡史』は、他書と比べるとやや詳細な記述があり、明晰な地図も伴うが、通史という書物の性質上、史料の齟齬や戦闘過程細部についての検討は少ない。辛徳勇氏の『歴史的空間与空間的歴史』⁹⁾は、特に劉邦入秦以後の行軍線路や地名の考証、現在地との同定について綿密な検証がなされており、参考に値する。尤佳氏の「劉邦入秦行軍路線考弁」など一連の論考には、劉邦集團の戦闘経過について詳細な考証があるが、劉邦の南陽から霸上までの時期に集中しており、劉邦集團の初期の戦闘経過についてはほとんど触れていない¹⁰⁾。本章はこのような先行研究の状況を踏まえ、とりわけ劉邦集團内の政治的派閥の形成を考察することを目的に、劉邦集團の戦闘経過を整理したい。先に述べたように、劉邦集團の入秦までの戦闘を、劉邦が陽郡長になった秦二世二年後九月（前208）までを第一段階とし、それ以後を第二段階として、それぞれ考察する。

1. 第一段階の戦闘過程

第一段階では、劉邦集團はまず沛・豊の占拠と守備を中心にして戦闘を展開し（秦二世二年六月まで、前208年）、そのご項梁集團とともに、東阿を包圍した秦軍との戦闘と、その追跡が主な任務であった（秦二世二年九月、この時は一〇月が歳首）。

(1) 胡陵・方与での戦いと豊・沛の防衛戦（二世二年一〇月、前208年）

『史記』卷八高祖本紀に、

於是少年豪吏如蕭・曹・樊噲等皆為收沛子弟二三千人，攻胡陵・方与。還守豊。

とあり、当時、胡陵・方与付近には秦の泗水監平が、郡所属の地方部隊の秦軍と一緒に駐屯していた（『史記』夏侯嬰列伝集解張晏曰く「胡陵，平所止県」）。さらにそこから徒歩一日で往復可能な距離にある薛に、秦の泗水守壯の秦軍が駐屯している。『史記』卷五三蕭相国世家には「將擊胡陵，方与，攻秦監公軍，大破之」とあるが、この記載の信憑性は低い。この戦闘では、胡陵を克服できなかったうえ、秦の泗水監平の部隊は劉邦の本拠地であった豊を包圍し、沛も攻撃された可能性があるからである（『史記』卷九五樊噲伝のこの戦闘に関する記載に「復東定沛」とあるので、沛も攻撃されたと推測される）。劉邦は豊で二日間立て籠もっていた。前述したように、沛県の吏員であった夏侯嬰と蕭何は、かつて秦の泗水監平と繋がりがあったことから、平を説得して平は反旗を挙げ、劉邦軍と連携するようになった。劉邦集團のなか、夏侯嬰・曹參・周勃・樊噲は、胡陵・方与の戦闘に参加したようであった。豊を救う戦闘には、夏侯嬰・曹參・樊噲が参加し、沛の防衛戦は、樊噲が指揮をしたようである。周勃は豊に戻らず、胡陵・方与の戦闘では、方与の戦闘を指揮し、これを下して守備していたようである（『史記』卷五七絳侯周勃世家には「下方与」とあるが、他の記事では周勃がこの時の豊の作戦に参加したという記録はない）。

(2) 薛西の戦闘と二回目の胡陵の戦い（二世二年一十一月。一十一月廿八日は前207年の元旦）

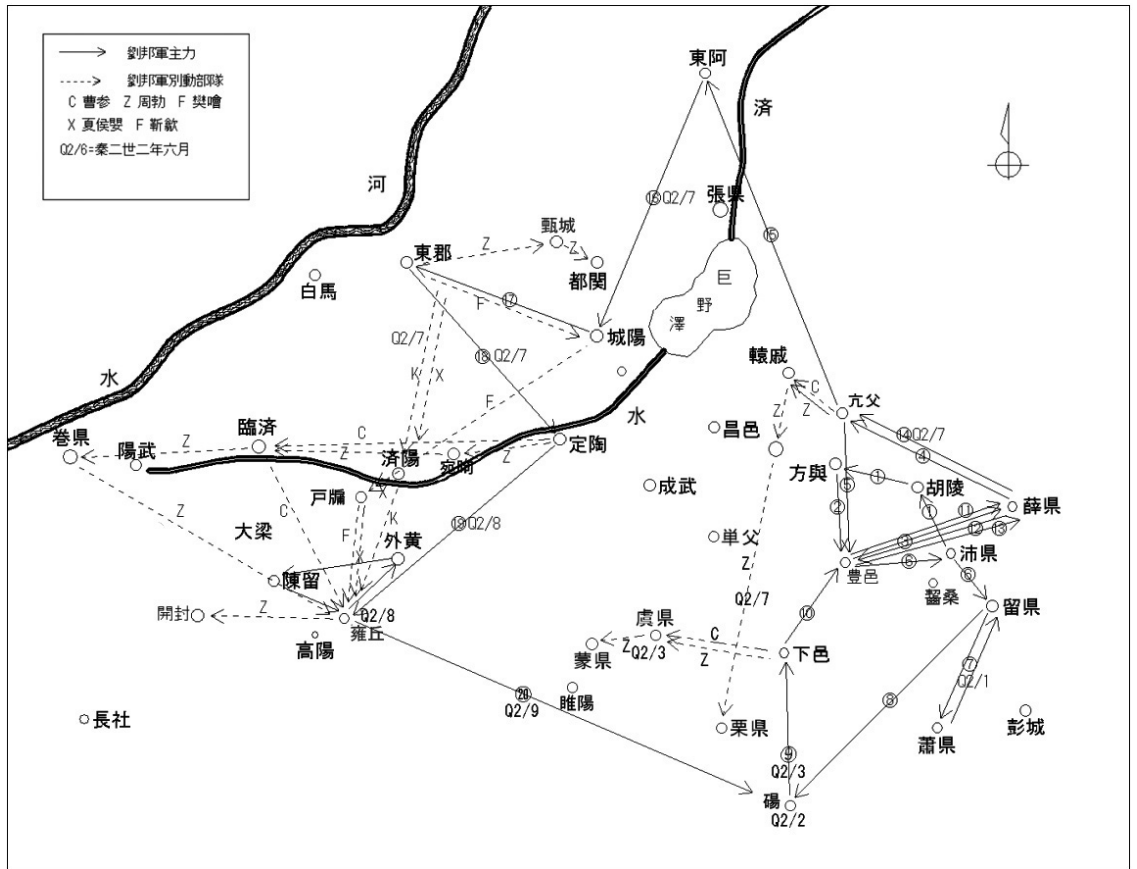
泗水監平との敵対状態を解消したのち、劉邦は泗水郡守壯の秦軍を攻撃した。この戦闘には曹參・樊噲が参加した。戦いは順調に進み、泗水郡守壯は殺害された（「殺泗水守，拔薛西」『史記』卷一六秦楚之際月表）。この戦闘のあと劉邦は亢父に行き、そのご再び胡陵を攻撃してようやくそれを下した（「還軍亢父，至方与」『史記』卷八高祖本紀）。そのご曹參が方与に赴き、周勃と守備を交替した（「徙守方与」『史記』卷五四曹相国世家）。

(3) 豊の反乱（二世二年一二月、前207年）

このとき、魏集團の周市が劉邦集團の勢力範囲に侵入した。そもそもこの地域は魏の移民が居住していたため、胡陵はすぐさま周市に降伏し、曹參が守備していた方与も周市に降伏した。周勃・曹參は胡陵・方与を進撃したが、戦果を挙げられず、劉邦の本拠地であった豊も周市に降伏した。劉邦は豊を取り戻そうとしたが、病気のために断念し、沛にもどった。沛は蕭何がいたため、反乱が起こらなかったようである¹²⁾。

(4) 劉邦と張良の出会いと、景駒との連合（二世二年端月前後、前207年）

図1 劉邦集團戦闘経過概念図（秦二世二年一〇月～九月）



この時期の劉邦集團周辺の状況は、陳勝軍が破れ、魏の周市が泗水郡の重要拠点を占拠し、秦の章邯が相を屠って泗水郡の隣の碭郡を制圧しようとしていた。

まず沛周辺の政治的状況が大きく変化した。陳勝軍の大司馬秦嘉は、楚王の末裔と称する景駒を楚王（仮王）に立てた。景駒は周辺の周政治勢力に対して傲慢なる命令を出したため、その年の二月には、その東方の斉、西北の魏、東南の楚との間に、名号に関する争いが生じた。また、呉にいた楚の元貴族である項梁は、景駒の楚王即位に憤慨し、泗水攻撃を企てていた。泗水郡周辺を攻撃した秦軍は二手に分かれ、西側の秦軍は陳県から東進し、南路の秦軍は北へ向かって進撃し、碭に到達した。

一方、陳勝のほかの部下が項梁と合流した。このとき陳勝の死亡はまだ確認されていない。秦嘉が景駒を楚王として立てたことは道義上の問題があるとして¹³⁾、項梁はこれを名目に、泗水郡を奪取しようとしていた。下邳に数万人の軍勢をもつ陳嬰は、項籍と連合する意思をすぐさま表明した。

こうして、秦軍が景駒集團の北と南に、項梁集團とその連合者が東南を包囲するという軍事態勢が整った。このような危険な状況を劉邦が知り得たとしても、景駒のいる彭城と沛は近いため、劉邦には景駒の傘下に入るほかに選択肢はなかったであろう。景駒と連合した劉邦の真の目的は、景駒の兵を借りて豊を奪還することにあったが、結局豊の奪還は失敗に終わった。

二世二年は、劉邦が張良と出会った年である。この出会いは劉邦集團にとって極めて重要であったが、劉邦と張良の出会いの時期と場所について、史料の記載は混乱している。留で出会った説や、劉邦が「略地下邳西」のときに張良と出会ったとする説もある¹⁴⁾。しかしこのとき下邳には、項梁と連合

Mar. 2012

前漢王朝建立時における劉邦集團の戦闘経過について（上）

する諸勢力の一つである陳嬰の約七万人の軍隊が駐屯していたはずであり、三千人しかない劉邦軍が実際に下邳を「略地」できたのか、など不明な点が多い。

このとき、南路の秦軍が傷に到達した。景駒と劉邦の軍隊は彭城から西進したが、彭城と傷の中間地点である蕭付近で秦軍と遭遇し、景劉連合軍は敗退した。景駒と劉邦がそのごに取った行動の詳細は不明であるが、ともかく劉邦は蕭の北東の、景駒の駐在地である留に戻り、そこから傷を攻撃した。史料によれば、劉邦集團は二月に傷を陥落して六千人の兵員を得、その結果劉邦集團の総軍勢は九千人になったという。

これと同時期に、秦嘉と景駒は、彭城一帯で項梁軍との戦闘を準備していた。しかし、重要な戦闘の準備であったにもかかわらず、景駒の部下である劉邦はその場にいなかった。しかも景駒と項梁の戦いでは、劉邦集團は景駒を一切支援しなかったようである。このような状況からすると、劉邦と景駒の間に何らかの分裂が生じたと考えられる。

前述したように、このときの劉邦軍は、景駒と項梁軍の戦闘とは反対方向に位置する傷を攻撃していた。そのご豊を奪還するために下邳を攻略し、北上して再び豊を包囲したが、またしても豊を奪還することはできなかった。

劉邦と景駒の関係が分裂したとき、項梁軍はすでに淮水を渡り、彭城の付近まで接近していた。秦嘉と景駒はこの戦闘に敗れ、秦嘉は胡陵まで逃げたが、項梁軍は勝利に乗じて進撃し続け、秦嘉を殺し胡陵を占領した。項梁はここを大本営に定めて別將を派遣し西進を図ったが、栗県会で章邯の秦軍に敗れ、薛に退却した。豊を攻撃していた劉邦は項梁が薛にいることを知り、会いに行った。項梁はすぐさま劉邦を信任し、「益沛公卒五千人、五大夫將十人」とした（『史記』高祖本紀）。劉邦が景駒と分裂し、短時間のうちに項梁と友好的関係を結んだことには、おそらく張良が関係している。張良は、項梁集團の項伯らと密接な関係にあり、それを利用して、項梁から韓国再建の許可をもらったのである。敵であった景駒の部下の劉邦を項梁がすぐに信任して、兵士と指揮官を与えるなどということは、そのようなことを仲介する人物がいなければ実現できない。そしてこの仲介者こそが、張良であったに違いない。

劉邦と張良が出会って以後、劉邦集團の行動は大きく変化した。張良と出会う以前は、劉邦集團の活動範囲はほとんどが劉邦の故郷である豊・沛の周辺であった。それが、張良と出会うのちは、傷山を越えて碭郡を占拠し、兵員を補充して軍勢力を拡大した。これが一つめの変化である。

二つめの変化は、先に述べたように景駒との連合を解消し、この区域に入ってきた項梁と短時間で連合したことで、それによって、さらに兵員を五千人増やすことができ、長い間奪還できずにいた豊を取り戻した。

（5）項梁集團に入った後の劉邦（二世二年四月前後）

劉邦集團が豊を取り戻した二世二年五月前後のようである、そのご項梁集團は楚王を立てた。劉邦集團は、この二か月間はわりあい平穩に過ごしていたが、七月に入ると、項梁軍と一緒に魏地を攻撃した。劉邦軍の曹參・周勃は亢父・爰威を攻撃し、周勃は劉邦の主力部隊を離れ、東繒・栗などで残留していた反対勢力を掃討し、さらに本拠地であった沛の隣町である齧桑を攻撃した。このような状況から考えると、劉邦集團の本拠地は非常に不安定であったことがわかる。

一方、章邯が指揮した秦軍は、劉邦集團の北にある齊の東阿を攻撃し包囲した。項梁が東阿を救援することに決めたため、劉邦軍もこの戦闘に参加した。曹參・周勃などの主要軍事將校は、他地から直接東阿に向かって秦軍と闘いこれを破った。秦軍は西へ退却し、濮陽で防衛態勢に入った。劉邦集團の先頭部隊は項梁軍の主力を離れ、城陽を陥落させ、曹參・周勃は樊噲と合流して濮陽を攻撃した。この攻城作戦は難航し、項梁は劉邦と項羽の部隊を東南へ派遣し定陶を攻撃させた。劉邦は定陶周辺で將校を各地に派遣し、幾つかの都市を攻撃させた。まず周勃が宛胸を陥落させ、曹參とともに臨濟を攻撃した。さらに周勃は西進し、故郷である卷まで進撃した。夏侯嬰は濟陽を攻撃し、そのご陽城からきた樊噲とともに戸牖を降した。

ここで三川守李由が濟水の南側から東進してきた。このとき李由軍が、濟水を越えて河水の畔にある濮陽の秦軍を直接救援せず、濟水の南側を東進したのは、おそらく項梁・劉邦軍の本拠地である薛周辺を攻撃するためであった。項梁・劉邦軍にとって、これは大きな威脅となったため、劉邦集團のほとんど全ての重要将領(曹參・周勃・夏侯嬰・樊噲・靳歙・馮無忌など)がそれぞれ臨濟・卷・濟陽・戸陽など諸地域から雍丘に集結し、李由の秦軍と決戦した。これは劉邦軍のこれまでで最大の戦闘であり、したがってその戦果も大きかった。秦軍は破れ、曹參率いる部隊は三川守李由を殺し、大功を挙げた。ちなみにこの大勝利が、以後項梁が敵を軽んじる原因の一つになり、項梁集團の最後の失敗に繋がっていくのである。この勝利ののち劉邦軍は外黄を攻撃し、さらに陳留まで進軍した。周勃は再び主力部隊を離れ、開封を攻撃した。このような戦況のさなか、項羽と劉邦は項梁敗死の知らせを受け、劉邦は碭に、項羽は彭城まで退却した。

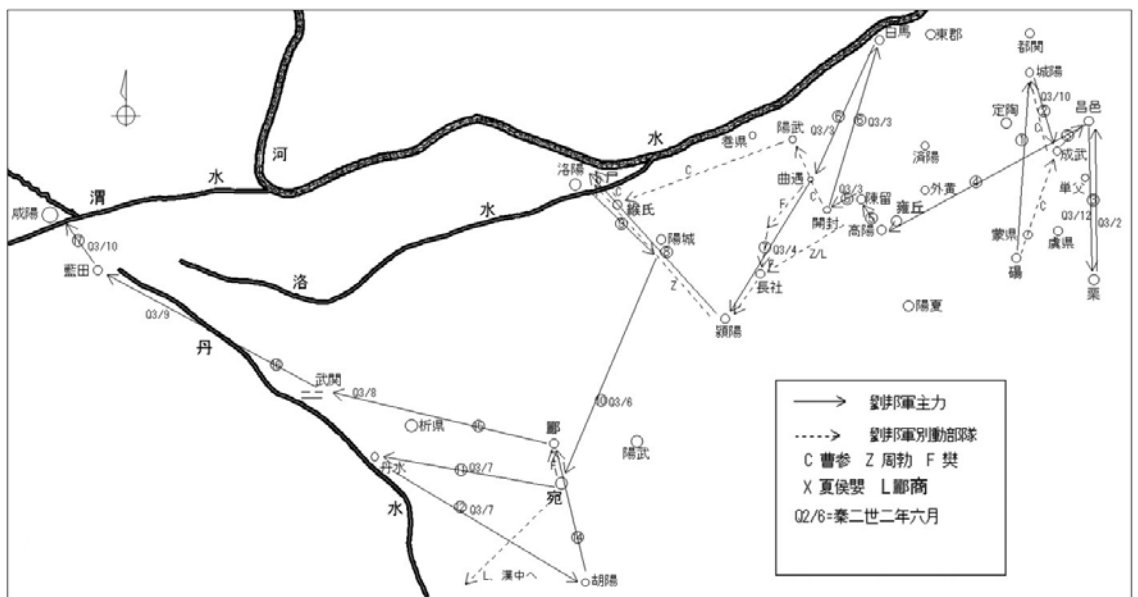
劉邦集團にとって、碭は非常に重要な地域であった。項梁の敗死後、劉邦は秦軍からの強い反撃を想定していながらも、戻ったのは故郷の豊・沛地域ではなく、碭であった。これは非常に興味深い行動である。上述したように豊・沛地域は、豊の反乱、絶え間ない胡陵・方与による造反、沛の衛星都市鬲桑の反乱などが起こっている。つまりこれは、豊・沛地域が劉邦集團の上層を構成する人びとの故郷であったにもかかわらず、実際にはこの地域を劉邦集團が完全に掌握できていないことを意味する。一方、碭の地は、二世二年二月に劉邦が三千人の部隊をもってここを獲得し、六千人の兵員を補充することができたところである。すなわち、この時期の劉邦集團内部では、豊・沛地域よりも碭と関係のある人びとが多数を占め、さらに劉邦自身も碭と密接な関係があったと思われる。蜂起以前の劉邦が群盗として活動していた地域は、芒碭の間であった(「亡匿隠於芒碭山沢巖石之間」¹⁷)。具体的に指し示す史料はないが、このとき現地の人びとと彼らの間に強い結びつきが生じたと考えられる。

2. 第二段階の戦闘過程 (二世二年後九月～漢元年一〇月)

(1) 劉邦が碭郡長に就任 (二世二年後九月, 前207年)

二世二年後九月, 楚の懷王は劉邦を碭郡長・武安侯に任命した(なお『史記』と『漢書』の記事には一か月の誤差がある)。同時に懷王は、劉邦が長者であるということを理由に、咸陽を攻撃する任務を

図2 劉邦集團戦闘経過概念図 (秦二世二年後九月～漢元年一〇月)



Mar. 2012

前漢王朝建立時における劉邦集團の戦闘経過について（上）

項羽ではなく、劉邦に与えたと史書は記すが、これについては、筆者は疑問視している。なぜならこのとき、懐王は項羽にも長安侯の爵位を与えているからである。秦と前漢にはどちらも「長安」に関わる爵位がある。秦には長安君成蟜がおり、その封地は長安郷にあったと考えられる。漢初の盧縮は長安侯に封ぜられたが、『史記』卷九三盧縮列伝に、

其親幸，莫及〔盧〕縮者。封為長安侯。長安，故咸陽也。

とある。すなわち項羽に長安侯の封号が与えられたということは、彼にも咸陽攻撃の任務が与えられたことを意味すると考えられる。これについてはさらなる証明が必要であるが、もしこの推測が正しければ、懐王は劉邦だけに関中を攻撃する権限を与えたのではなく、項羽を懐柔するため、長安侯という封号を与えて、間接的に項羽にも入秦の許可を与えたと解釈できる。そしてこのことが、のちに楚漢の争いを発生せしめた原因の一つとなったのではないかと思われる。

劉邦は陽郡長就任後に論功行賞を行い、劉邦集團の重要メンバーに爵位と官職を与えた。曹参を執帛・建成君に、樊噲を上聞爵に封じ、周勃に虎賁令を与えた。

劉邦の、碭での具体的な行動に関する史料は少ないが、『史記』卷一八高祖功臣侯者年表には、碭で「初起」した数名の功臣の侯状が記されている。その概略を以下に記す。

潁陰侯灌嬰，以中涓從起碭。

蓼侯孔聚，以執盾前元年從起碭。

費侯陳賀，以舍人前元年從起碭。

隆慮侯周竈，以卒從起碭。

曲城侯蠱逢，以曲城戸將卒三十七人初從起碭。

河陽侯陳涓，以卒前元年起碭從。

棘丘侯襄，以執盾隊史前元年從起碭。

東茅侯劉釗，以舍人從〔起〕碭。

臺侯戴野，以舍人從起碭。

樂成侯丁禮，以中涓騎從起碭中。

甯侯魏選，以舍人從起碭。

これらをみるに、時間を示す記述には、「前元年」と記録するものと、何も記録しないものがあり、場所に関する記述には、「碭」と「碭中」の区別がある。顔師古は「前元年」を「前元年，謂初起之年，即秦胡亥元年。後皆類此」としているが、おそらくこの解釈は誤りであろう。表1にみえるように、劉邦は秦二世元年九月に沛で造反したのであり、二世元年に碭での軍事行動はないからである。

二世元年九月以前であれば、確かに劉邦は芒碭間で活動していたが、その当時ではまだ正式な軍事組織と階級制度はなかったようであり、「中涓」や「舍人」などで集團構成員の身分を表していた。上に示したように、前元年初從の棘丘侯襄の侯状は「以執盾隊史前元年從起碭」とあるが、そもそも百人前後で構成された群盜期の劉邦集團に、詳細な職務分担（執盾隊）や正式な軍事組織の職名は存在していなかったはずで、ここにある前元年は「初起之年」ではないとおもう。これに関して、宋人呉仁傑『兩漢刊誤補遺』卷三には、

『漢紀』二年，沛公將碭郡兵西，灌嬰以中清從，按嬰侯狀，從起碭，与孔聚同，則前元年謂胡亥之二年，非元年也。是歲後九月楚懷王以沛公為碭郡長，封武安侯，方高祖之起沛，父老迎以為令耳，徒以楚制，故稱公。至是封武安然後始有封爵，列于諸侯，以始封之歲稱元年，固其所也。其後王漢中乃以復至霸上之年為漢元年，故謂胡亥二年為前元年者，所以別漢元年也。

と、「前元年」を劉邦の武安侯の元年（二世二年後九月）と比定しており、この意見は極めて妥当である。もしこの解釈が正しければ、陳淖・周竈・魏選・劉釗・戴野・丁禮・灌嬰・蠱逢などの功臣が劉邦集團に加入したのは、二世二年後九月となる。

（2）成武・昌邑・栗付近の戦闘（二世三年一〇月～一二月，前207年）

『史記』卷八高祖本紀によれば、

秦二世三年、以沛公為碭郡長、(懷王)令沛公西略地入関。

とある¹⁸⁾。しかし、劉邦集團は西ではなく成武に向かい、そこで東郡長率いる秦軍と戦い、さらに碭郡北東の城陽で王離の秦軍と戦って、いずれも勝利を取めた。これら城武の戦闘は、曹參指揮する別動部隊が行ったようである。そのご劉邦軍は杠里で東郡長の部隊を潰滅させた。この前後に樊噲らが安陽・亳南で小規模な戦闘を行っている。

昌邑付近での戦闘は二度行われたようである。この戦闘について『史記』高祖本紀の記載は最も詳細で、一方『史記』卷一六秦楚之際月表と『漢書』卷一上高帝紀はこの戦闘の二月の部分しか記載せず、『史記』卷九〇魏豹彭越列伝の記載も極めて簡略である。この『史記』卷八高祖本紀に、

沛公引兵西、遇彭越昌邑、因与俱攻秦軍、戦不利、還至栗遇剛武侯、奪其軍、与魏將皇欣、魏申徒武蒲之軍并攻昌邑、昌邑未拔。

とあり、昌邑での戦闘が確かに二回記録されている。

ところが、梁玉繩は、『史記』高祖本紀に記載された一回目の昌邑の戦闘は存在しないと指摘する¹⁹⁾。尤佳氏は梁玉繩の意見に賛同し、その理由として、『漢書』高帝紀上と『史記』秦楚之際月表(尤氏論文では「秦漢之際月表」と誤植)及び『史記』と『漢書』の彭越伝に、昌邑に関する戦闘が一回しか記録されていないことを挙げている。さらに『史記』卷八高祖本紀の関連記録に対する史料批判をおこない、「沛公引兵西、遇彭越、因与俱攻秦軍」について、成陽は昌邑の東側にあり、「引兵西」が事実と矛盾することをもって、この記事の信憑性はないとしている²⁰⁾。しかし、『史記』卷八高祖本紀では、記述が実際の地理的方位と異なることは多くみられるのである。後にも触れるが、例えば白馬の戦闘の例をあげると、『史記』卷八高祖本紀には「開封未拔、西与秦將楊熊戦白馬」とあるが、白馬は開封の東北にある。また、劉邦が碭郡長に任命されて、「令沛公西略地入関、收陳王、項梁散卒」とあるが、実際は、劉邦は西ではなく、東の成武などで戦闘を展開した。当時の戦闘における複雑性と多変性を考えれば、このような方位の記述の違いをもって、すぐさま史料の存在そのものを否定するのではなく、迂回などの変則的な軍事行動も充分考慮するなど、慎重に検討していく必要があるだろう。ともかく、『史記』の記載を直接的に否定する他の史料が存在しない限り、現時点ではこの記事を採用すべきである。

(3) 陳留・開封・曲遇付近の戦闘(二世三年三月)

昌邑の戦闘が不利になったことにより、劉邦集團は西方向に転進した。高陽で酈食其の意見に従い、陳留を陥落して「積粟」を獲得し、軍糧を確保した。そのご劉邦軍はさらに西進し、開封の北部で趙賁の秦軍と戦って勝利したが、趙賁が開封を死守したため、開封での戦果は挙げられなかった。そのごさらに北西方向に進み、白馬²¹⁾・曲遇で楊熊の秦軍と戦闘し、楊熊軍を潰滅させた(表2にみえるように、『史記』卷五五留侯世家には、楊熊との戦いを洛陽戦闘の後に記録している。ほかの史料にはこのような戦闘順序は記録されていないので、これはおそらく誤りであろう)。そのご陽武で秦軍と戦い、さらに劉邦・周勃・樊噲らは長社を攻撃したのち潁陽を攻めた²²⁾。史料には、曹參が潁陽の戦闘に参加した記録はないのだが、おそらく劉邦軍は二手に分かれ、曹參はもう一つの軍を率いて済水沿線から西進して、緱氏を攻撃し、劉邦・周勃は潁陽から緱氏に向かって曹參と合流したと思われる。

この時期になると、劉邦集團は数軍に分かれて戦うことが増えている。諸軍事幹部の功績の記録に「従攻」の文字がある場合、これはおそらく劉邦に従う主力部隊の戦闘であろう。「攻」としか記録されない戦闘は、主力部隊から離れた別動部隊による可能性が高い。それに伴い諸軍事幹部の役割分担も明確化してきた。曹參はほとんどの場合、主力部隊を指揮し、周勃は度々主力部隊を離れて長距離の襲撃や掃討作戦に携わり、樊噲は劉邦と常に行動を共にしていた(「常従」)。

(4) 轅轅・潁陽・河津・洛陽での戦闘(二世三年四月)

この戦闘には二つの目的があった。一つは、黄河を渡って関に入ろうとする秦軍を阻止することであり、もう一つは、関中に入る交通路の取得である。一つ目の目的は達成したものの、二つ目の目的は失敗し、劉邦は函谷関を経由する入秦を断念した。

このときの戦闘順序について史料にはかなりの混乱がみられ、それらを要約すると、以下のような

Mar. 2012

前漢王朝建立時における劉邦集團の戦闘経過について（上）

る。

洛陽付近の戦闘経過一覧

潁陽—轅轅	———	平陰—河津—洛陽	———	陽城	（『史記』高祖本紀）
潁川（陽）—韓地	———	平陰—河津—洛陽—轅轅	———	陽城	（『漢書』高帝紀上）
				洛陽—轅轅—楊熊擊破—南下	（留侯世家）
				洛陽—尸北—河津	（『史記』灌嬰伝）
陽武—轅轅—緱氏	———	河津	———	尸北	（『史記』曹相国世家）

このように記録が混乱しているために、張良が具体的にいつ劉邦と再会したのかということ、さらにその再会が劉邦の函谷道を放棄して武関道から入秦したこと、どのように関係するのか、ということが曖昧になっている。しかし、張良と劉邦の初会と再会は、劉邦集團が発展していくうえで極めて重要な事項である。劉邦が張良と初会したとき、劉邦は豊の奪還に執着していたが、そのご新しい本拠地を陽に築いた。この決断は、結果的に劉邦集團の拡大とそのごの劉邦陽郡長の就任へと繋がるため、非常に大きな意味をもつ。つぎに劉邦が張良と再会したときは、劉邦集團は函谷関から秦を攻撃すること放棄し、南陽・武関からの入秦を成功させたのである。このような重要な政治的決断と張良の存在とが、いったいどのような関係にあるのかということをも究明するには、まず劉邦と張良が再会した時期を正確に把握する必要がある。

『史記』卷八高祖本紀に記す劉邦の轅轅経路について、瀧川資言『史記会注考証』卷八高祖本紀の条引く中井積徳氏の言に「『漢書』無轅轅二字、此疑衍」とある。尤佳氏などの現代学者はこの問題には触れていない。また上記の要約にみられるように、洛陽周辺の戦闘に関する「留侯世家」と「灌嬰伝」の記録と諸記載の相違については『史記会注考証』でも取り上げていない。

しかし、要約した諸記載からみれば、この史実の混乱を該当記事内の「衍字」ひとつに帰するのはいささか短絡すぎるであろう。洛陽攻撃までの劉邦集團の状況をみると、劉邦と周勃らは潁陽を攻撃したあと、潁陽から黄河を渡ろうとする秦軍を阻止するため、平陰にむかっている。平陰は現在の孟津県であるから、地理的関係からみれば、潁陽から平陰に向かうには、轅轅を経由する必要がある。のちに、洛陽周辺の戦闘に失敗した劉邦集團は陽城に向かったが、やはりここでも轅轅を通らねばならない。いま要約した史料をみると、『史記』卷八高祖本紀と『史記』卷五四曹相国世家では、いずれも劉邦軍が洛陽に向かう途中、轅轅を通過したと記録しており、劉邦軍が潁陽から平陰に向かう途中で轅轅を通過したのは確実である（表2では、この時の轅轅通過を②と表記する）。二回目の轅轅通過（表2ではこれを⑥と表記する）は洛陽から陽城に向かうため、『漢書』卷一高帝紀上と『史記』卷五五留侯世家は、この時の轅轅を記録したと考えられる。『漢書』卷一高帝紀上には、平陰の戦闘のまえに「因張良遂略韓地」と明確に記されているが、これは張良の内応によって劉邦が韓地を攻略したと理解すべきで、この時に二人が再会したとは思えない。劉邦と張良との再会は、『史記』卷五五留侯世家に記録されるように、劉邦が洛陽から南下するときであり（「沛公之從雒陽南出轅轅，良引兵從沛公」）、陽城にいた前後の時期に、劉邦集團はなんらかの伝達手段をもって張良からの情報と意見を得、武関経由の入秦を決定したと考えられる。すなわち洛陽周辺の戦闘順序をまとめると（丸数字は表中の表記）

潁陽 (①)—初回の轅轅通過 (②)—緱氏—平陰 (③)—河津 (④)—洛陽 (⑤)—二回目の轅轅通過 (⑥)—陽城 (⑦)

となり、⑤の時期に劉邦軍の一部は尸北で秦軍と戦闘した。したがって、楊熊の秦軍との戦い（『史記』卷五五留侯世家）と、河津を絶ったこと（『史記』卷九五灌嬰伝）がそれぞれ洛陽の戦闘の後にあるのは、いずれも記載の誤りである。

(5) 南陽・漢水周辺の戦闘（二世三年六月～七月）

洛陽の戦略に失敗した劉邦集團は、陽城を経由して、南陽に向かった。南下中の戦闘は順調で、劉邦

軍はまず壘東で秦の南陽守に勝利し、南陽守を迫撃したが、南陽守は宛城で立て籠もった。劉邦は諸侯に先じて秦に入らんがため、いったん宛城を放棄して武関に向かおうとしたが、張良の進言により再び宛城を包圍した。

その後の記録は少し混乱している。『史記』卷八高祖本紀では、南陽守の降伏を劉邦は受入れ、「乃以宛守為殷侯」と記録する。しかし、『史記』卷五四曹相国世家には「取宛、虜齧、盡定南陽郡」と、曹参の部隊は南陽郡守を捕虜にしたとある（『漢書』曹参伝に同じ）。さらに『史記』卷九五樊噲伝には「東攻宛城、先登」とある。これらの記事の混乱からすると、南陽守の降伏の経緯は、『史記』卷八高祖本紀の記事以上に複雑であったことが窺える。例えば、曹参・樊噲らによる軍事行動が一定の功を奏し、曹参は南陽守を捕まえたが、他城の降伏を喚起するため、捕獲した南陽守を殷侯に封じた、という経緯であった可能性もある。

宛城降伏後、胡陽・析南・酈などでも戦闘があったが、どれもすぐに劉邦軍に降伏したようである。王陵もこのときに劉邦集團に加入したが、その加入の経緯と、劉邦集團内での彼の経歴についてもまた、記述が混乱している。たとえば王陵の降伏の場所について、『漢書』卷一高帝紀上は丹水とするが、『史記』卷八高祖本紀には「王陵降西陵」とある。

その劉邦軍は二手に分かれ、酈商軍は漢中に向かい、劉邦と主力部隊は八月に武関を陥落した。このときすでに章邯は項羽に降伏しており、秦の趙高は使者を派遣して、劉邦と関中を二分する申し出をしたが、劉邦はそれを拒否して北西に進撃した。さらに嶢関・藍田南・藍田北の戦闘を経て、ついに劉邦は関中に入り、入秦後最後となる芷陽の戦闘を制して覇上に辿り着いた。そして秦王子嬰は降伏し、秦王朝は幕を閉じたのである。この部分の経緯については、史書の記事は一致している。

おわりに

劉邦集團が、二世元年九月の沛占拠から漢元年一〇月覇上に入って秦を滅ぼすまでの記事は、ほとんどが公的史料に記されているが、これまで述べてきたように、内容が矛盾している部分が多くある。本稿では、それらの記事を整理して検証し、一定の見解を示し得たが、主力と別動部隊の戦闘区分などについては、なお考察の余地がある。この点について、以下に大まかな考察を述べておきたい。

劉邦集團の戦闘には明確な特徴がある。第一段階の戦闘はほとんど豊・沛周辺で展開され、主要な戦闘には、劉邦集團の重要幹部らのほぼ全員が参加している。しかし同時に、曹参が主力を指揮する一方で、周勃は時折主力を離れて、遠方にて単独の軍事行動と地方行政が任されるなど、軍事幹部に対する劉邦の使い分けの端緒がすでに現れはじめている。

第二階段に入ると、主力部隊と別動部隊の別行動が増える。曹参が主に主力部隊を指揮し、周勃はほ

表3 劉邦集團主要幹部の爵位

	曹参	周勃	樊噲	夏侯嬰	灌嬰	傅寛	靳歙	酈商	陳豨	周緜	備考
二世元年九月				七大夫							
二世二年十月	七大夫			五大夫							
端月											
二月			国大夫								
三月		五大夫									
七月	五大夫		列大夫	執帛							懐王を立つ
八月			上聞爵	執圭							
後九月	執帛										
二世三年十月			五大夫		七大夫						
三月	執圭		卿		執帛	卿					
漢元年十月	建成侯	威武侯	列侯	昭平侯			建武侯	信成侯	侯	侯	漢王になる

注) 初起から漢王になるまで、李開元氏『漢帝国の成立と劉邦集團一軍功受益階層の研究』中表一に史料を補充し著者が作成

Mar. 2012

前漢王朝建立時における劉邦集團の戦闘経過について（上）

とんど主力とともに行動しているが、遠方地域の襲撃と掃討作戦を担当することが多く、樊噲と夏侯嬰は常に劉邦と一緒に行動して近衛部隊を指揮することが多い。これが、劉邦集團が幹部を使用する際の実態であったことは明らかである。またこの時期には、功績による主要幹部の爵位の昇降が及ぼす人間関係の変化も存在していたと思われる。表3は、その爵位の変化をまとめたものである。

下篇にて、このような劉邦集團の主要軍事幹部の爵位の昇降と、主要将校たちの「初従」と戦闘の関わりを分析し、この時期の劉邦集團内部の政治的派閥が形成される兆候を述べることにする。

【付 記】

本研究は科学研究費補助金基盤研究（B）（平成22～25年度）「最新の考古調査および礼制研究の成果を用いた中国古代都城史の新研究」（研究代表者・佐川英治）の成果の一部である。

注

- 1) 李開元『漢帝国の成立と劉邦集團——軍功受益階層の研究』汲古書院、二〇〇〇年三月。
- 2) 趙翼『廿二史札記』卷一『史記』変体条に、「『史記』曹參世家叙功処、絶似有司処作冊籍、自後樊噲・酈商・夏侯嬰・灌嬰・靳歙・傅寛・周緜等伝、記功俱用此法。併細叙斬級若干・生擒若干・又分書身自擒斬若干・所將卒擒斬若干。又総叙攻得郡若干・県若干・擒斬大将若干・裨將若干・二千石以下若干、織悉不遺、另成一格。蓋本分封時所抛功冊而遺料簡存之者也」とある。さらに孫徳謙『太史公書義法』に「凡此戰功登録、出自公令」とある（台湾中華書局、一九六九年一月、一六頁参照）。
- 3) 『史記』卷十八高祖功臣侯者年表に、「積日曰閔」とある。
- 4) 太字は『史記』と『漢書』の差異。表IIにある秦二世三年四月の諸記載の間には齟齬があり、記載の順番で史料を並べているが、丸数字はで筆者が考えた順番である。「※」史料に誤りがあるとおもう部分である。なお表に引用した原文は、書式上の都合により、編集を加えている。
- 5) 王先謙『漢書補注』中華書局、一九八三年、九九四頁上段参照。
- 6) 崔適『史記探源』中華書局、一九八六年、二〇一頁参照。
- 7) 朱東潤『史記考索』香港太平書局、一九六二年、五八頁参照。
- 8) 藤田勝久『項羽と劉邦の時代——秦漢帝国興亡史』講談社、二〇〇六年、第四章・第五章。
- 9) 辛徳勇『歴史的空間と空間的歴史』北京師範大学出版社、二〇〇五年。
- 10) 尤佳「劉邦入秦行軍路線考弁」（『天府新論』、二〇一〇年第三期）。「劉邦循武関道入秦原因新解」（『河南大学学报（社会科学版）』、二〇一〇年第六期）。
- 11) 陳鎮蘇『漢代政治与「春秋」学』中央廣播電視大学出版社、二〇〇一年、三七頁参照。なおこれに異を唱える意見もある。
- 12) 『漢書』蕭何伝に「高祖起為沛公、何嘗為丞督事。師古曰：「督謂監視之也。何為沛丞、專督衆事」とある。
- 13) 『史記』項羽本紀に「梁謂軍吏曰、陳王首事、戦不利、未聞所在。今秦嘉背陳王立景駒、大逆亡道」とある。
- 14) 『史記』卷五留侯世家に「後十年、陳涉等起兵、良亦聚少年百餘人。景駒自立為楚假王、在留。良欲往從之、道還沛公。沛公將数千人、略地下郢西、遂属焉。沛公拜良為厖將。良数以太公兵法説沛公、沛公善之、常用其策。良為他人者、皆不省。良曰、沛公殆天授。故遂從之、不去見景駒。」とあるが、そのあと張良の言として「良曰、始臣起下邳、与上會留、此天以臣授陛下。陛下用臣計、幸而時中、臣願封留足矣、不敢當三万户」とある。また『史記』卷一八高祖功臣侯者年表に「以厖將從起下邳」とある。
- 15) 劉邦と項梁が出会ったのは二世二年四月のことであり、同月に景駒は項梁に破られている。つまり一か月という短い間に劉邦は景駒と別れ、項梁の信任を得たのである。
- 16) 『史記』卷五七絳侯周勃世家に、「定魏地。攻爰戚・東繒、取之、以往至栗」とある。
- 17) 『史記』卷八高祖本紀。
- 18) 『漢書』高帝紀には、「[二世二年] 後九月、以沛公為碭郡長、遣沛公西收陳王、項梁散卒」とある。
- 19) 梁玉繩『史記志疑』卷八。
- 20) 尤氏前掲論文「劉邦入秦行軍路線考弁」。
- 21) 白馬の戦闘について、『史記』卷八高祖本紀には、「開封未拔、西与秦將楊熊戰白馬」という記録しかない。白馬は開封の東北にあるが、ここでは「西与秦將楊熊戰白馬」と記載されており、その原因は不明である。
- 22) 『漢書』卷一上高帝紀には「潁川」とあるが、誤りである。

(2011年11月25日掲載決定)

表 2

Table with columns for month/year, location, and historical events. Months listed include 二、三月、十一月、十二月、一月、五月、六月、七月、八月、九月、十月.

Table with columns for month/year, location, and historical events. Months listed include 四月、五月、六月、七月、八月、九月、十月、十一月、十二月.